



二酸化炭素の純フラックス ($12\text{gC m}^{-2} \text{ year}^{-1}$)

【図23】1995年に合わせてデータを補正した全海洋における大気・海洋間の二酸化炭素のフラックス。(Feelyら, 2001)

る必要が出てきており、定期航路の商船などに測定機器を搭載して高密度の観測が行われるようになった。

日本でのこのような観測の例としては、国立環境研究所による亜寒帯太平洋表層での1995～2001年にわたる Pco_2 測定がある【図24】。

季節変化が大きい太平洋亜寒帯域では、春夏秋冬における Pco_2 の季節変化は大きく、これらの海域が春から夏にかけては二酸化炭素の吸収源になっているのに対し、冬はベーリング海を中心に供給源になっていることをこの図は示している。

同様な計測は気象庁による観測船でも行われている。気象庁は、東経137度線に沿った測線などで Pco_2 の測定を行い、その結果、亜熱帯海域では冬季から春にかけて二酸化炭素の吸収源になっているという、亜寒帯とは逆の季節変化を示すデータを得ている【図25】。